

メイド文化と音声学

川原繁人

※本稿は、川原氏の原稿をもとに、本誌編集長たかとらが再構成しました

この論文の原稿依頼がきた時、正直引き受けていいものか迷いました。なぜなら、私はアメリカでの研究生生活が長く、日本語で論文を書くことに慣れていない上、秋葉原文化やメイド文化に関してそこまで専門的に掘り下げて研究した自信がないからです。それでもこの原稿を書こうとしたのは、メイドの名前と声を音声学的に調べることで、言語一般に共通する規則性が多少なりとも明らかになった、という嬉しい発見があったからです。そして、音声学の入門というのは、必ずしも楽なものではないけれども、こういう身近な題材を使

えば、音声学に触れたことのない人でも、多少なりとも音声学の概念に親しんでいただけではないかと思っただけです。そういう意味で、本論は「音声学から見たメイド文化」を論じると同時に、「メイド文化から見た音声学」を目指したいと思うわけです。

本論では、音声学の基礎的概念がメイド文化の分析にどのように貢献するかについて、音声学に触れたことが全くない方にも分かりやすいように論じていきたいと思います。

これをきっかけに、「メイド音声学」にとどまらず、音声学一般に興味を持つ人が出てくれば、望外の喜びであります。

1 音象徴とメイドの名前

第1のトピックとして、「メイドの名前がどのように付けられるか」という問いについて考察してみよう。これは、音象徴という現象に関するもので、古代ギリシャ、プラトンの時代から議論されています。

音象徴とは何か

音象徴とは何か。ここで問題となっっているのは、音と意味の間につながりがあるのかどうかということです。近代言語学の基礎を作り上げた偉大な言語学者ソシュールは、「言語の恣意性」を一般言語原理の1つとして掲げました。つまり、音と意味の間に必然的なつながりはない。もしあったとするならば、全ての言語である意味に対して同じ音が使われていなければおかしい。例えば、日本語で「ある四足動物」のことを「*inu*」と呼び、英語で「dog」と呼ぶのは全くの偶然であり、その四足動物をある特定の音で表現する必要はない。これが恣意性の原理です。

一方で、この立場に反論し、音と意味には多少なりともつながりがあるという意見もあります。この立場の代表として、これまた近代言語学の基礎を作り上げた言語学者サピアの実験が有名です。この実験では、多数の英語話者に、ある未知の言語があり、「大きなテーブル」と「小さなテーブル」に

該当する別々の単語があると仮定してもらいます。そして、その二つの単語は *mi* と *ma* であると伝え、*mi* と *ma* のどちらが大きなテーブルで、どちらが小さなテーブルかを判定させました。

少し自分なりに考えてみてください。

おそらく *mi* のほうが小さくて、*ma* のほうが大きいと考える人が多いのではないだろうか。つまり、「*mi*」は小さくて、「*ma*」は大きいのです。このように音そのものに意味が付随しているような現象が見られ、そのことを音象徴と呼びます。

この音象徴はあくまでそういう傾向があるというだけで、いろいろ例外があります。例えば、「*mi*」は小さいと言っても、英語では *big* という単語があるわけで、これは例外です。ただ、サピアのように実験してみたり、ある言語の単語を網羅的に調べてみたりすると、そうなることが統計的に多いのです。

さらに、音象徴は多くの場合、音声的にしっくりと説明できるパターンが多いのです。例えば、「*mi*」という母音が「大きなイメージ」に結びつけられるのは「口が大きく開く」から、と説明できるでしょう。

男性らしい阻害音、女性らしい共鳴音

次に、一般的な人名と音象徴の関係について説明しましょう。英語なんかではかなりいろいろ分析されていて、阻害音は男性に、共鳴音は女性に結びつきやすいと言われています。

阻害音、共鳴音というのは子音の分類で、口の中の気圧が上がり気流が妨げられて出る音が阻害音、気流が通り道に響いて出る音が共鳴音です。具体的には、日本語において濁点が付く可能性のある「カ行、サ行、タ行、ハ行」が阻害音、そうでない「ナ行、マ行、ヤ行、ラ行、ワ行」が共鳴音です。例えば、男性名EIOと女性名EIOの最後の音を比べてみると、ㄱが阻害音で、ㄴが共鳴音なわけです。

さて、何となくでもいいので、日本語ではどうだろう、と考えてみてください。「カ行、サ行、タ行、ハ行」（阻害音）と「ナ行、マ行、ヤ行、ラ行、ワ行」（共鳴音）を比べてみてください。どちらがより男性的で、どちらがより女性的な音か、イメージが湧きますでしょうか。阻害音⇨男性的、共鳴音⇨女性的、というイメージを持った人もいるのではないのでしょうか。

	男性名	女性名
阻害音	67 (64.4%)	35 (32.7%)
共鳴音	37 (35.6%)	72 (67.3%)
合計	104	107

表1：安田生命の人気名前リストにおける子音の分布

このイメージに普遍性があるか確かめるため、明治安田生命が調査した2011年生まれの新児人気ベスト50の名前を分析してみました。リストされている名前を子音ごとに分解し、男性名、女性名それぞれで数え上げた結果が表1です。やはり、男性名では共鳴音36%に対し阻害音64%と阻害音が多く、反対に女性名では阻害音33%に対し共鳴

音67%と共鳴音が多いという結果になりました。こうした背景があつて、メイド喫茶では「きつと名前に共鳴音が多いはず……」という仮説が湧いてきたのが2011年の年末です。

意外と女性的ではない@ほおくむカフェのメイドの名前

先取りして言えば、私をはじめに立てた仮説は間違っていました。間違っていたのにはいろいろな理由があるのですが、ここでは時系列順に私の思考を追ってみることにしましょう。

表1の結果を見て、はじめに思いついたのは「秋葉原のメイドさん達は、女性らしさをアピールしているのだから、共鳴音⇨女性的という傾向が一般の女性名よりも顕著に出るに違いない」ということです。この仮説を検証するため、大手メイド喫茶「@ほおくむカフェ」のウェブサイトにアクセスし、メイドさん達の名前に出てくる子音を数え上げました。大手だけありまして、2011年11月当時の時点で133人もの名前がリストされていました（読み方が分からないのもあり、漢字の名前は除いています）。

しかし、結果は、295個の子音のうち、共鳴音は1771個で、比率としては全体の58%に過ぎませんでした。一般的な女性名よりも共鳴音の割合が低く、仮説と反対の結果が出てしまったわけです。そこで、秋葉原のメイドさん達に直接会い、実際に彼女達がどうやって名前を選んでいるかいろいろ

る聞いてみました。

その結果、メイドさんが自分の名前を選ぶ場合、必ずしも音の感で選んでいるわけではない、ということが分かってきました。彼女達は、好きなアニメのキャラクター名や、好きな食べ物や花の名前をもとにして自分の名前をつけることが多いのです。同じ店舗の中で同じ名前をつけられないし、引退した方とかぶっても困る、さらには、やはり競争社会ですから目立った名前を付けたい、ということで国民的人気アニメのキャラクター名を借りているという証言も得られました。

話を聞いていると、「秋葉原のメイドさんたちは、女性らしさをアピールしている」という根本的な前提が間違っているのでは、と思うようになりました。きっかけになったのは「銀狐(ぎんこ)」さんという名前のメイドさんで、お店では「しっかりとしたお姉さん」的な役割を担っている方だそうです。

萌え系かツン系か

そこで思い切って仮説を変えてみました。こういう分類が正しいのか疑問の余地は残りますが、メイドさんにも「ふわふわしていて、かわいらしい」イメージの「萌え系」の方と、「しっかりとっていて、ちょっと近寄りたくない」イメージの「ツン系」の方がいらっしやるのかもしれない、と。少なくともそういう分類が可能なのでは、と考えたわけです（後に、「萌

阻害音	共鳴音
さたか (sataka)	わまな (wamana)
せたか (setaka)	めやな (meyana)
さてか (sateka)	らめな (ramena)
そたか (sotaka)	よまな (yomana)
せとか (setoka)	れよな (reyona)
てそか (tesoka)	めよな (meyona)
たそか (tasoka)	わもな (wamona)
てすか (tesuka)	れゆな (reyuna)
とそか (tosoka)	よもな (yomona)
てせか (teseka)	めれな (merena)

表2：実験用の名前リスト

え」の概念の中に、ツンとデレがワンセットになった「ツンデレ」という概念があり、この2つの分類は適切ではないとの指摘がありました。そして、当時の私と共同研究者の篠原和子先生の感覚では、ふんわりした萌え系に共鳴音が合致し、ツン系に阻害音が合致しているような印象でした。

というわけで実験です。まず、実験用に3文字の実在しない名前のペアを作りました。ペアごとに母音は統一し、1つの名前は阻害音だけを含み、1つの名前は共鳴音だけを含んでいます。例えば、「さてか(sateka)」と「らめな(ramena)」です。このようなペアを10個作りました(表2)。そして、それぞれのペアについて、秋葉原で実際に働くメイドさん10

人に、どちらの名前が萌え系で、どちらの名前がツン系かという判断をさせていただきました。その結果、74%の確率で阻害音の名前がツン系と結び付きました。これは偶然によつて起こりえる確率(50%)よりも統計的に高い数値です。実際、10人全員が50%より高い割合で阻害音の名前

をツン系と結び付けました。

被験者のメイドさん以後で感想を聞いてみると、「サ行の名前はツンっぽいけれどラ行は萌え系っぽい」とか、「サ行とタ行がツンっぽい、ラ行が萌えっぽい」というような予想通りの結果が返ってきました。なるほどやはりメイドさん自身も、私達と同じようなことを考えていたわけです。

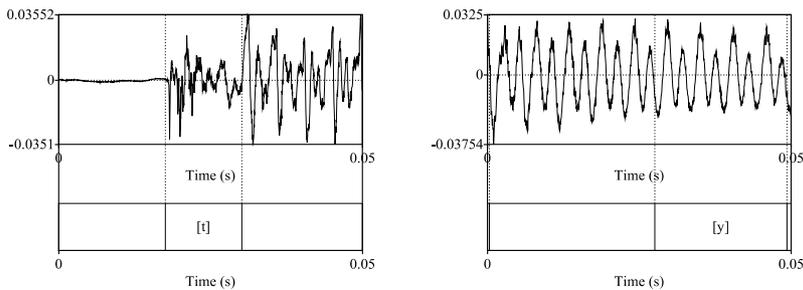


図1：[t]と[y]の音声波形

つまり、阻害音 \parallel ツン系、共鳴音 \parallel 萌え系という音象徴はメイドさんの意識に内在するのだ、という結論が得られたわけです。この後、メイドさんでない日本人や、さらに英語話者でも同じ実験をしてみました。同様の結果が得られましたが、阻害音 \parallel ツン系、共鳴音 \parallel 萌え系という音象徴は、もしかしたら言語や文化を超えた何かなのかもしれません。

さらに、音響学的にもう

ちよつと突っ込んでみると面白いことが見えてきます。図1は空気の圧力レベルの変化を示した、「 E と I 」の音声波形です。破裂音である E は、口が舌で一度完全に閉じられず、その口が完全に閉じられている間も、空気が肺から口のなかに入ってきますので、口の中で気圧が高まります。その結果、口を開いたときに破裂が起きます。その破裂というのが、誤解を恐れず大胆に言いますと、波形がツンツンしているわけです。一方、共鳴音の I は、どちらかと言うと波形が丸みを帯びています。つまり、私達は、こういった、音響的な「尖り」や「丸み」を、「ツン」とか「萌え」という概念に無意識に結びつけているのかもしれない。

2 メイド声の音響分析

第2のトピックは、「メイド声にはどのような特徴があるか」です。秋葉原でチラシ配りをするメイドさんの声を聞いた方なら、その独特な発音が印象に残っているのではないのでしょうか。

メイド声の特徴を音響的に分析するため、メイドリフレで勤務している2人の現役メイドの方に地声とメイド声で様々な文やフレーズを発音していただき、その声を録音しました。非常に奥深く、まだまだ表層的なことしか分かっていませんが、調査結果をご紹介しますと思います。

メイド声は抑揚のついた声

まず、メイド声は「声が高い」という印象を受けましたので、イントネーションが測りやすい文を読んでいただき、声の高さを分析しました。こ

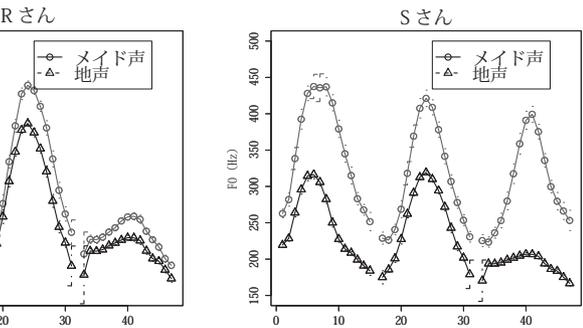


図2：メイド声と地声のイントネーション比較

う場合、阻害音を入れてしまうと空気の流れが止まってイントネーションが測れないので、共鳴音を主とした文を作ります。今回は、単純な「主語-目的語-動詞」の文を4つ用意しました。例えば「森村がアマリヤを哀れんだ」のような文です。声の高さは、厳密には基本周波数(F0)で測定します。基本周波数とは、声帯が1秒間に何回震えるかを示す指標で、単位はヘルツ(Hz)です。同じ文を地声で4回、メイド声で4回、このセットを4回繰り返して読んでもらいました。

よって、1つの声で、1文につき8回読んでもらい、これが4文あるので、データ数は32個です。全ての文に共通するイントネーションパターンを取り出すため、主語、目的語、動詞をそれぞれ15等分し、それぞれの区間で32回の平均を取りました。それらを図示すると図2のようになります。

まずどちらのメイドも、地声よりメイド声の方が、声が高くなっています。しかし、2人の間でパターンが多少異なっています。Rさんは、周波数の低いところではメイド声と地声にそこまで違いがなく、周波数の高いところでは大きく違いが出ています。一方、Sさんは周波数の低いところと周波数の高いところの両方で違いが出ています。しかしそれでも、Sさんも周波数の高いところでの違いが、周波数の低いところでの違いよりも大きいですね。このように、メイドさん2人で多少の違いはあるものの、メイド声の時には「高い周波数のところで変化が大きい」という共通点があります。実はこれ、人間言語のイントネーションの特徴で、文のある部分を強調して読む時につける抑揚のパターンとてもよく似ています。人間言語では抑揚をつけるとき、周波数の低いところよりも周波数の高いところを操作する傾向にあり、その傾向がメイド声にも現れています。

次に、メイド声ではゆっくりしゃべっているのか、という疑問が生まれます。イントネーションの抑揚が大きくなっているわけですから、その分、大きな変化を生み出すのに時間がかかるのではないかという問いが生じたわけです。ところが、主語と目的語の平均発話時間を測ってみても、2人とも

地声とメイド声であまり差がありません。どうもメイド声だから特にゆっくりしゃべっているというわけではないようです。

平均で毎秒何ヘルツ声の高さが変化しているかも計算しました。図2のように主語、目的語それぞれで、声の高さが上がって下がりますので、上り下りを別々に計算しました。主語と目的語、上りと下りのどこを比べてみても、地声よりメイド声の方が、平均変化率が高くなりました。つまり、メイド声は「毎秒当たりの声の高さの平均変化率が高い」という特徴を持っています。簡単に言って、メイド声は声の高さの変わり方が早いのです。

最後から2つ目の優しい発音

次に母音の発音のいろいろな特性を測るために「あいうえお」をいろいろな順番で読んでいただきました。これは録音している時から明らかだったのですが、Rさんがとても面白い特徴的なメイド声を出してくれました。「あいうえお」と読んでいるときに「え」がとても特徴的だったのです。実際に音声聞いていただけではないのが残念ですが、国際基督教大学でこの講義をした時に「どの母音が一番かわいいか」という質問をしたところ、「え」がかわいい」という反応が一番多かったのです。

ひと言で言って、「え」の部分で声帯が大きく開いていて、優しい印象を受けました。ちょっと息がもれる感じで、専門

2番目を優しくすることで、最後のかわいさがより引き立っている」といった意見も出ました。

ではSさんはどういったパターンを示したのでしょうか。Sさんは後ろから2番目の母音に声帯の開きが来るというパターンではなく、メイド声になるとどの母音でも声が大きくなりました。Sさんの場合、メイド声になると、全体的に元気に発音しているようです。

優しい声と元気な声

最後に母音空間を計測しました(図4)。母音空間とは、それぞれの母音において、舌がどのような位置で発音されるかを表したものです。現在の音声学のツールを使うと、音響データをもとにそれぞれの母音がどのように発音されているか、ある程度正確に計測することが可能です。縦軸は舌の高さを表していると考えてください。下に行くほど口が開いて舌が下がり、上に行くほど舌が上がって口が閉じます。横軸は左に行けば行くほど舌が前に出て、かつ唇が横に開いていることを示しています。「いーだ」と不満を言ったときに強調される動きです。

まず、Rさんの母音空間をじっくり見てみると、地声と比べてメイド声では「あ」の口の開きが大きくなっているのが分かります。また、「い」が全体的に後ろへシフトしていますね。一般に「い」を発音する時には唇が横に広がるのですが多いのですが、これはその開きが少なめであることを表して

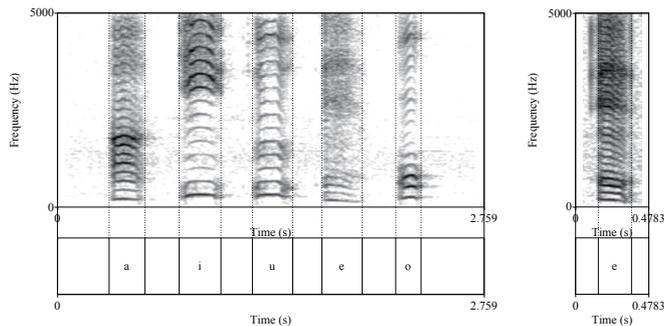


図3：Rさんの声紋分析

用語で breathy vowel と呼びます。これを実際に確認するため、声紋分析にかけました(図3)。左図がメイド声の「あ、い、う、え、お」です。横軸が時間、縦軸が周波数、黒い帯がエネルギーの分布を表しています。5個の母音を比べると、特に高い周波数帯で「え」の横帯が薄くなっています。これは、声帯が大きく開いているからだと考えられます。比較用に地声の「え」を並べてみますと、こちらは横帯がはっきり出ています。

実は、日本語の5つの母音を「あ、い、う、え、お」の順だけでなく、様々な順番で録音したところ、Rさんは後ろから2番目の音にこの特徴的な声帯の開きを出すことが分かりました。実際にこのメイドさんの発音を聞いてみると、声帯が大きく開くと音の強さが弱まり、優しい印象を受けます。講義を受け、実際に発音を聞いた学生の中からは「最後から

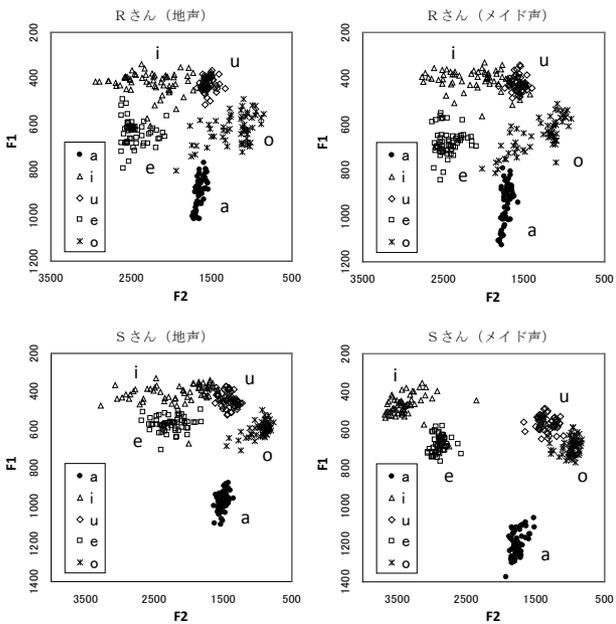


図4：母音空間

います。唇の横への開きが少なめで、優しい印象を受けるメイド声です。不満を言う時に使う「いーだ」で強調される口の開きが非常に弱くなっているのです。後ろから2番目の母音に、声帯の開いた音が出てくる発音の仕方とも何らかの関係があるのかもしれませんが。このメイドさんはメイド声によって「優しさ」というものを目指しているのかもしれませんが。

Sさんは地声とメイド声にもっとはつきりとした違いが出

ていて、メイド声では「う」がかなり後ろに来ています。これは、おそらくメイド声で唇が丸まっていることを示しています。唇が丸まり母音空間が前に広がるので、舌が相対的に後ろに下がっているように計測されるわけです。また、「い」が非常に前に出ていますね。唇の横へ開きも大きくなっているでしょう。「いーだ」のような感じで、Rさんと逆のパターンです。「あ」では大きく口が開いていますね。全体的に全ての母音をはっきり発音している印象です。Sさんの場合、メイド声で「元気さ」を目指しているのかもしれない。

3 まとめ

第1節では、音象徴とメイドの名前について分析しました。一般に、障害音は男性名に、共鳴音は女性名に結びつきやすい傾向があります。ところが、@ほお〜むカフェのメイドさんの名前を調べてみると、一般の女性名より共鳴音の割合が少ないことがわかりました。その後、メイドさんへのヒアリング調査により、メイドさんが様々な制約条件の下で自分の名前を選んでいることが判明したため、今度はメイドさん自身が音象徴を持っているかどうか実験してみました。その結果、障害音⇨ツン系、共鳴音⇨萌え系という音象徴がメイドさんの意識に内在していることがわかりました。

第2節では2人のメイドさんの声を録音し、声の特性を分析しました。地声とメイド声は周波数の高いところで開きが大きく、これは抑揚をつけて話す時の一般的なパターンと同

じでした。Rさんに5つの母音を読んでもらうと、最後から2つ目の母音で声帯が開き、「優しい」印象の声になることがわかりました。また、母音空間を調べると、Rさんは口の動きが控えめであり、反対にSさんは口の動きが大きく「元気な」印象の声でした。

正直、本論の分析はまだまだ探索的なもので、今後よりたくさんさんのメイドさんの声を収集し、分析していく必要があります。現時点では、まだ2人しか分析できていませんが、他のメイドさんの声も録音したり、声優さんにメイド声を発音していただいたりしています。これらの結果は、随時発表していきたいと思っています。これからも音声学を通してメイド文化が研究されることを願っています。

謝辞

まず、実験に参加して頂いたメイドさん達に感謝を捧げたいと思います。また、この原稿を書くにあたって、佐野真一郎氏、篠原和子氏、松浦年男氏、桃生朋子氏からコメントをいただきました。最後に、この原稿に挑戦する機会をくださった、たかたらさんに感謝いたします。

(1) 詳細に関心のある方は、第1節はShinohara and Kawahara

(2013)「第2節はKawahara (2013)を参照してください。」

Shinohara and Kawahara (2013) The sound symbolic nature

of Japanese maid names. Proceedings of Japanese Cognitive

Linguistics Association. pp.183-193.

Kawahara (2013) The phonetics of Japanese maid voice I: A

preliminary study. 音韻研究 16: 19-28. 東京：開拓社

(2) 2011年11月に明治安田生命ホームページよりデータ取得。

<http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/>

(3) @ほお〜むカフェホームページ <http://www.cafe-athome.com/>